

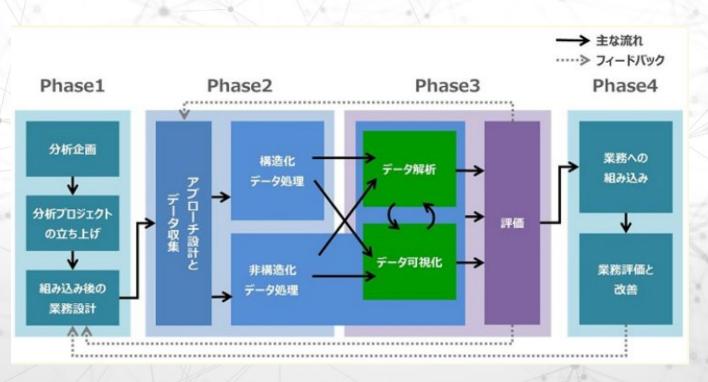
## 「Numpy」とは

元々数値計算用に設計されたわけではなかった Pythonで科学計算を容易くするために開発された 「ライブラリ」

## Numpyを使う利点

- numpy.<u>nd</u>arrayというn次元配列データを取扱うため の強力なデータ形式を使える
- 科学計算の豊富な関数やメソッド
- 計算が高速( numpy内部は高速なC言語が主に使われており、 また最適化された計算ロジックで実装されている
- forループを使った動的な処理にも向く

#### データサイエンスプロジェクトの流れ



https://www.ipa.go.jp/jinzai/itss/itssplus.html



## Numpyの基本的な使い方

- Numpyをimportするときは「np」を略称とするのが 慣習
- ・(※「asOO」で略称を設定する)



## Numpyの基本的な使い方

np. ○○○({処理対象のオブジェクト}) 様々な関数名をnp. の後ろに指定して()内のオブジェクトに処理を適用する

```
Iist_A = [0, 1, 2]
array_A = np.array(list_A)

[→ [0 | 2]
numpy.ndarray
```

リスト形式のデータが格納された変数「list\_A」に対し、np.array()というnumpyのメソッドを適用した様子

## Numpyの基本的な使い方

- 関数は膨大な種類が用意されている。
- 暗記するものではなく、調べて使うもの。



## numpy.ndarray というデータ型を知る

# その前に復習: Pythonには<u>リスト型</u>というデータ形式がある

$$a = [0, 1, 2, 3, 4]$$

[](角カッコ、スクエアブラケット)で囲まれ、 カンマで区切られた複数の値を持つ形式

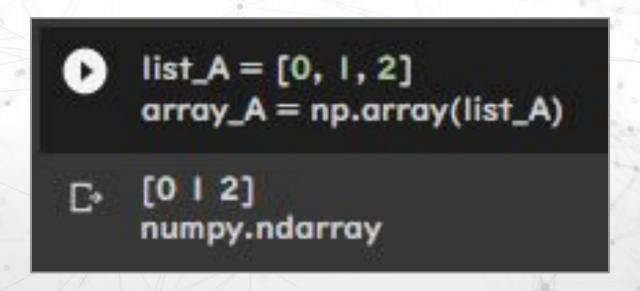
## numpy.ndarrayとはn次元配列データ

```
axis = 1
     [[70, 95, 80],
axis = 0 [1] [35, 42, 50],
     [76, 37, 65]
```

• ndarrayはリスト型を積み重ねたような姿をしている(-次元のndarrayもある)

axisという概念で行と 列が区別される

# 最もシンプルにはリストに対してnp.array()を適用して生成される



## ndarray同士の四則演算ができる

```
a = np.array([1, 2, 3, 4, 5])
b = np.array([2, 2, 3, 6, 0])
a + b
array([ 3, 4, 6, 10, 5])
```

## リスト型データとの対比

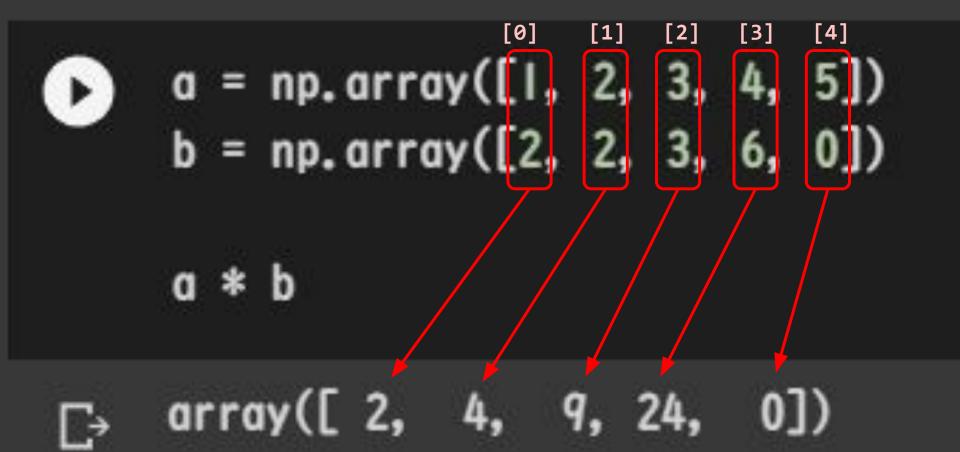
リスト	numpy.ndarray
異なる型の値を格納できる	同じ型の値しか格納できない
リスト同士の四則演算は煩雑	ndarray同士の四則演算が容易
入れ子構造のリストは作れるがaxisという概念がないため疑似的にしか多次元配列を扱うことができない	多次元配列を扱える

全体像を把握したところで、 実際にコードを動かして感覚を掴んでいきましょう。

現時点でまだイメージが掴めていなくても 全く問題ありません!



array([ 2,



## ユニバーサルな計算が便利な例

経度	緯度	占有率	人口	ベッドルーム数	部屋数	築年数	世帯所得	
-122, 23	37.88	2,555556	322.0	1.023810	6,984127	41.0	8, 3252	0
-122.22	37.86	2, 109842	2401.0	0.971880	6,238137	21.0	8, 3014	1
-122, 24	37.85	2,802260	496.0	1.073446	8,288136	52.0	7, 2574	2
-122.25	37.85	2,547945	558.0	1.073059	5.817352	52.0	5, 6431	3
-122, 25	37.85	2. 181467	565.0	1.081081	6.281853	52.0	3, 8462	4
				4/1				

各カラムごとの全レコードの中央値や標準偏差などを計算したい! そういうときに便利。

a = np.array([1, 2, 3, 4, 5]) b = np.array([2, 2, 3, 6, 0]) a == b

ray([False, True, True, False, False])

```
a = np.array([ 1 , 2 , 3 , 4 , 5 ])
b = np.array([ 2 , 2 , 3 , 6 , 0 ])
a == b
array([False, True, True, False, False])
```

## numpy.ndarrayとはn次元配列データ

```
axis = 1
     [[70, 95, 80],
axis = 0 [1] [35, 42, 50],
     [76, 37, 65]
```

• ndarrayはリスト型を積み重ねたような姿をしている(-次元のndarrayもある)

axisという概念で行と 列が区別される

#### スライシングのstart, end, step

0, 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15

```
a = list(range(30)) # 0~29を要素にもつList print(a[2: 15: 3])
```

 $[] \rightarrow [2, 5, 8, 11, 14]$ 

#### スライシングのstart, end, step

```
start
0, 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15
                         step = 3
                                     step = 3
                                                 step = 3
           step = 3
                a = list(range(30)) # 0^29を要素にもつList
                print(a[2: 15: 3])
                [2, 5, 8, 11, 14]
```

## ネスト構造のリスト

[2]

[ [1, 2],

[3, 4], [5, 6]

整数型の値を要素に持つリス トに対してnp.array()を適用

a = np.array([1, 2, 3])

リスト型の値を要素に持つリス トに対してnp.array()を適用

```
a = np.array(
  [[1, 2],
  [3, 4],
  [5, 6]])
```

## Numpyにおける行列の計算

行列a 3

1 1

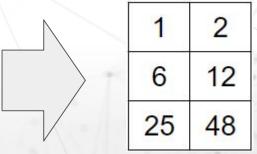
行列b

2	3
5	8

同じ位置の要素同士で四則演算 = ユニバーサル計算



行列aとbの積の場合



行列積とは異なる点に注意

## Numpyの2次元配列の構造

```
axis = 1
      [0] [1] [2] 
[70, 95, 80],
axis = 0 [1] [35, 42, 50],
      [76, 37, 65]]
```

## 2次元配列としてのテーブルデータ

axis=1のiເ	ndex	→ [0]	[1]	[2]	[3]	[4]	[5]	[6]	[7]
		世帯所得	築年数	部屋数	ベッドルーム数	人口	占有率	緯度	経度
	0	8, 3252	41.0	6,984127	1.023810	322, 0	2, 555556	37.88	-122, 23
	1	8, 3014	21.0	6, 238137	0.971880	2401.0	2, 109842	37.86	-122, 22
	2	7. 2574	52.0	8, 288136	1.073446	496.0	2, 802260	37,85	-122, 24
	3	5,6431	52.0	5.817352	1.073059	558.0	2,547945	37.85	-122, 25
	4	3, 8462	52.0	6, 281853	1.081081	565.0	2, 181467	37.85	-122, 25

各行:一件一件のレコード(顧客や商品などの情報)

各列:各レコードの特徴を記録したデータ(特徴量)

## 2次元配列としてのテーブルデータ

axis=1 — 各特徵量

axis=0		世帯所得	築年数	部屋数	ベッドルーム数	人口	占有率	緯度	経度
	0	8, 3252	41.0	6.984127	1.023810	322.0	2, 555556	37.88	-122, 23
各レコード	1	8, 3014	21.0	6, 238137	0.971880	2401.0	2, 109842	37.86	-122, 22
3 7	2	7, 2574	52.0	8,288136	1.073446	496.0	2.802260	37.85	-122, 24
	3	5, 6431	52.0	5.817352	1.073059	558.0	2,547945	37.85	-122, 25
	4	3, 8462	52.0	6.281853	1.081081	565.0	2. 181467	37.85	-122, 25

各行:一件一件のレコード(顧客や商品などの情報)

各列:各レコードの特徴を記録したデータ(特徴量)

#### 2次元配列への集約関数の適用

```
axis=0
   [[88, 78, 76],
     [98, 88, 100],
     [64, 78, 77],
     [89, 67, 78]]
  max [98, 88, 100]
```

```
[[ 88 78 76]
[ 98 88 100]
[ 64 78 77]
[ 89 67 78]]
print("①: ", np.max(a, axis=0))
①: [ 98 88 100]
```

axis=0を引数としたnp.max()の 場合、スコープを縦軸にとり、 全ての列に対して、「その列の中での最 大値」を返す。

#### 2次元配列への集約関数の適用

```
axis=1
                     max
[88, 78, 76],
                    88
 [98, 88, 100],
                    100
 [64, 78, 77],
 [89, 67, 78]]
                    89
```

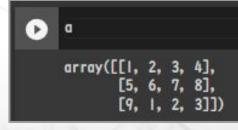
```
[[ 88 78 76]
[ 98 88 100]
[ 64 78 77]
[ 89 67 78]]
print("2: ", np.max(a, axis=1))
2: [ 88 100 78 89]
```

axis=0を引数としたnp.max()の 場合、スコープを縦軸にとり、 全ての列に対して、「その列の中で の最大値」を返す。

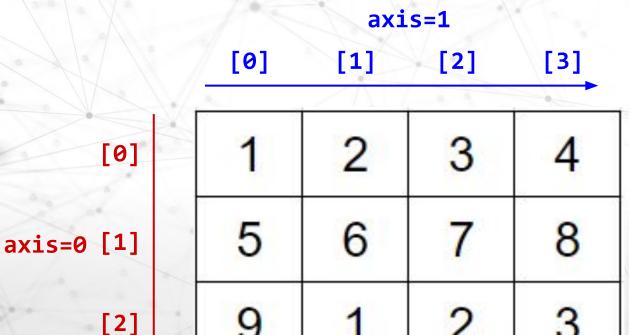
## 「行列a」に対するインデックス指定

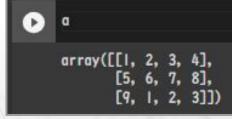
行列a

1	2	3	4
5	6	7	8
9	1	2	3

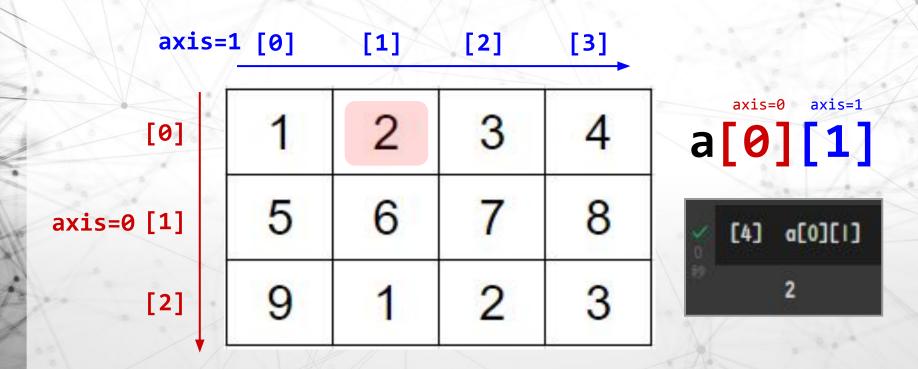


## 「行列a」に対するインデックス指定

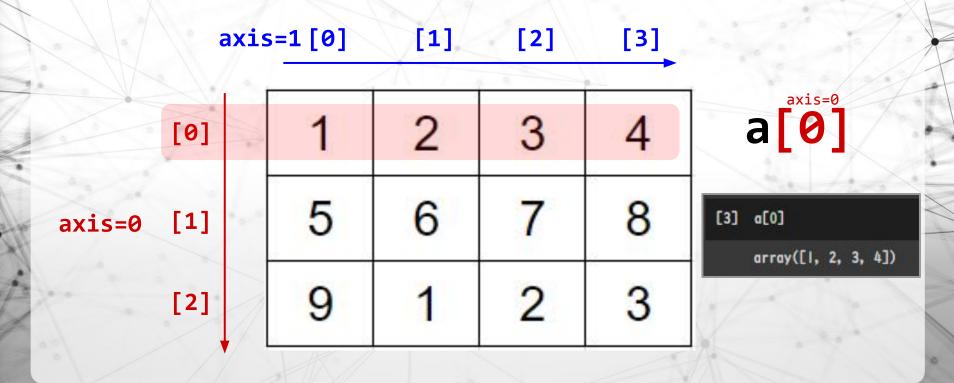




## 「行列a」に対するインデックス指定



### axis=0に対する範囲指定



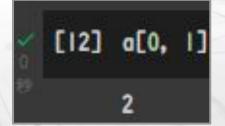
## ndarrayの場合、カンマ区切りでも良い

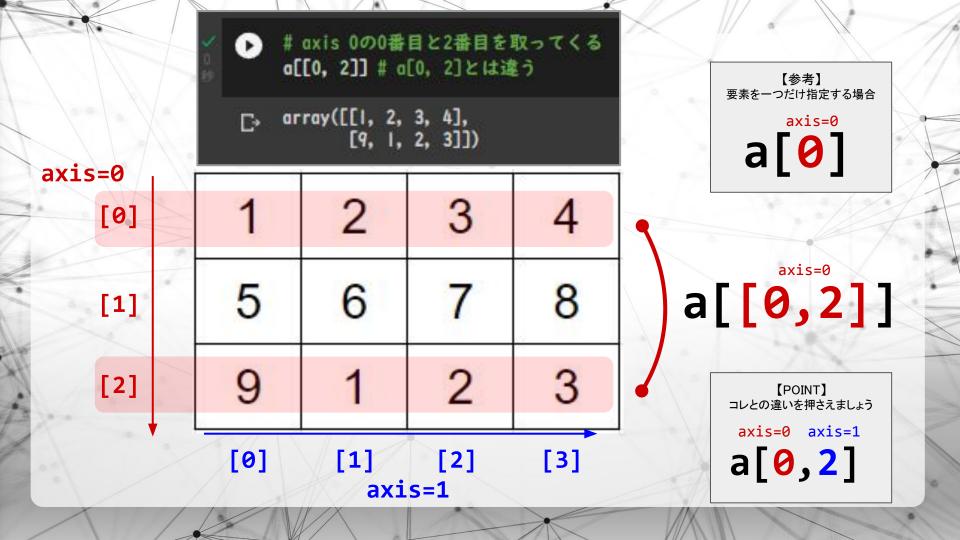
axis=1

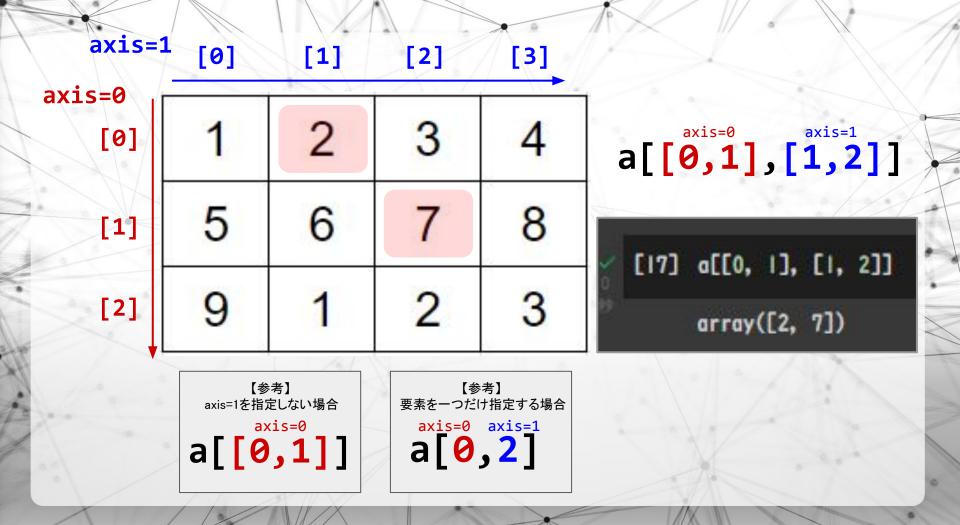
a[0,1] = a[0][1]

	[0]	1	2	3	4		
axis=0	[1]	5	6	7	8		
	[2]	9	1	2	3		
		[0]	[1]	[2]	[3]		

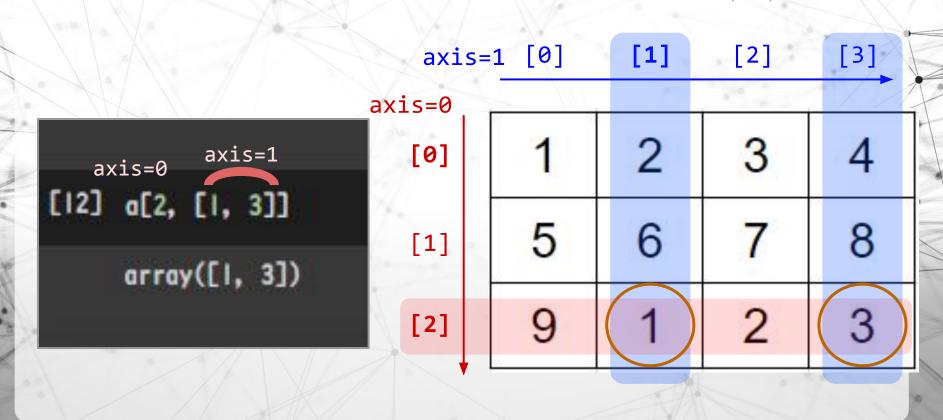








### 一つの軸から複数の要素を指定(1)



## 一つの軸から複数の要素を指定(2)

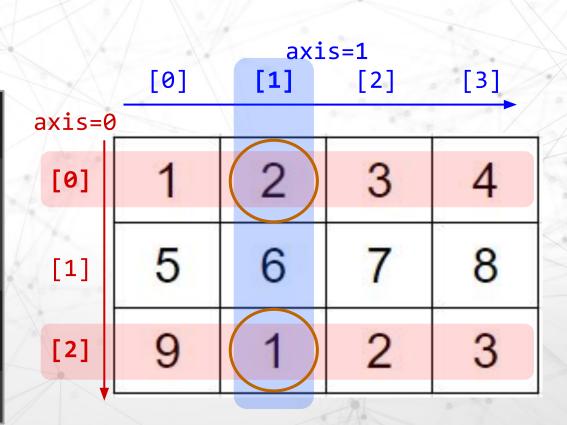
axis=0に指定するリストや配列は axis=0と同じ縦向きにする

a[[[0], [2]], I] axis=0 axis=1

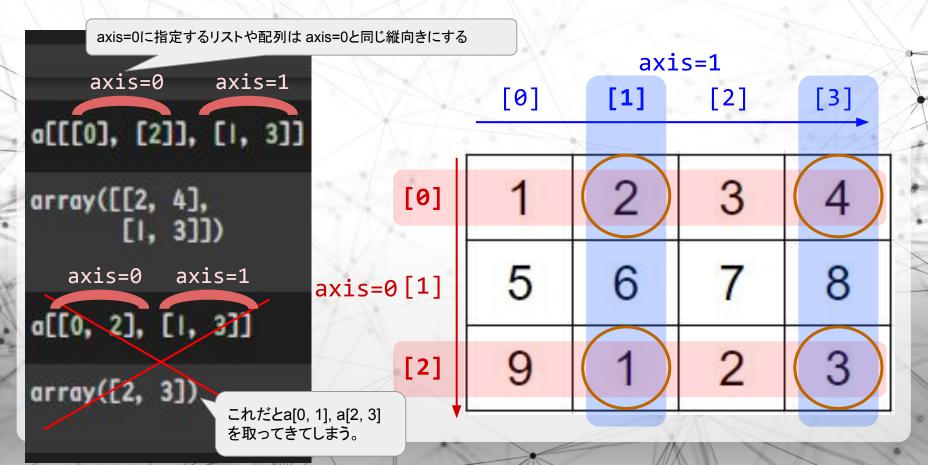
array([[2], [1]])

axis=0 axis=1 a[[0, 2], I]

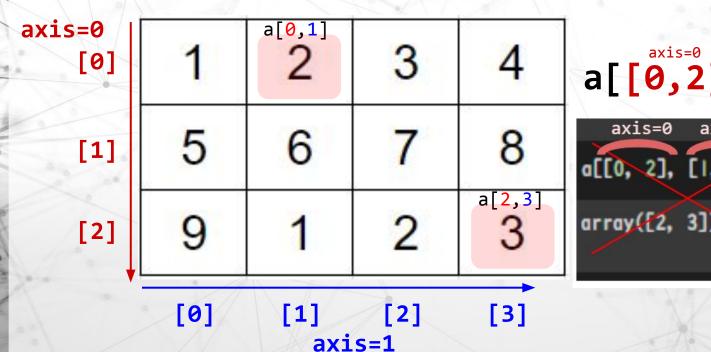
array([2, 1])



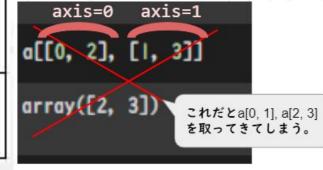
### 複数の軸から複数の要素を指定



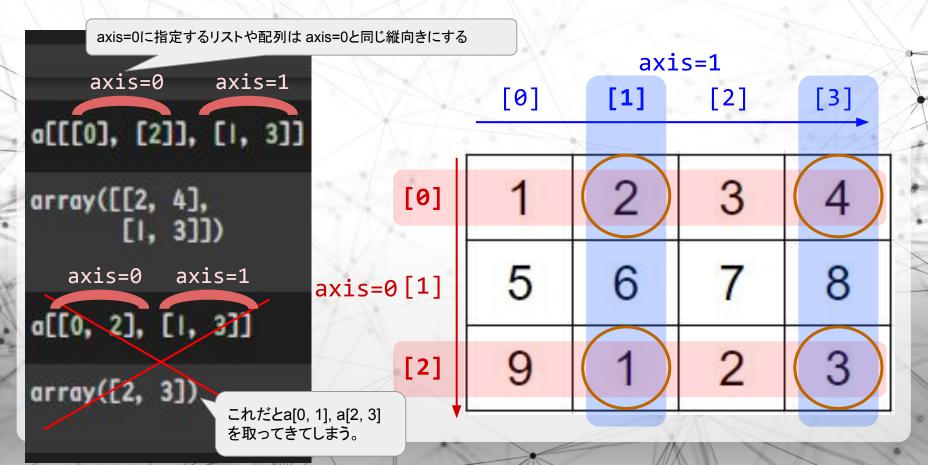
#### axis=0に指定するリストや配列を 縦向きにしないと、これになってしまう (飛び飛びの個別要素の抽出になる)



a[[0,2],[1,3]]



### 複数の軸から複数の要素を指定



# axis=1の記載を省略すなわちaxis=0だけ一部指定してaxis=1の要素は全選択する場合のおさらい

axis=1を省略する場合
axis=0
a[0]

axis=1を省略する場合
a[[0,2]]

axis=1
[0] [1] [2] [3]
[0] 1 2 3 4

axis=0[1] 5 6 7 8
[2] 9 1 2 3

axis=1
[0] [1] [2] [3]
[0] 1 2 3 4

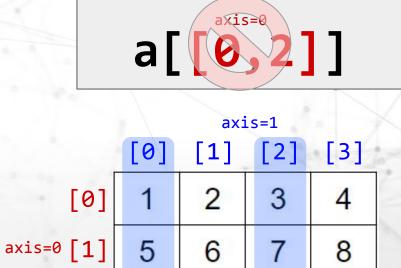
axis=0 [1] 5 6 7 8
[2] 9 1 2 3

# ではaxis=0の記載を省略すなわちaxis=1だけ一部指定してaxis=0の要素は全選択する場合は??

[2]

9





3

axis=1を省略する場合

-		axis=i			
and it	[0]	[1]	[2]	[3]	
[0]	1	2	3	4	
axis=0 [1]	5	6	7	8	
[2]	9	1	2	3	

# axis=0のインデックス指定を省略することはできないので、スライシングを使う。

axis=1を省略する場合

a[0]

axis=0を省略する場合

axis=0 axis=1

axis=1を省略する場合

a[[0,2]]

axis=0を省略する場合

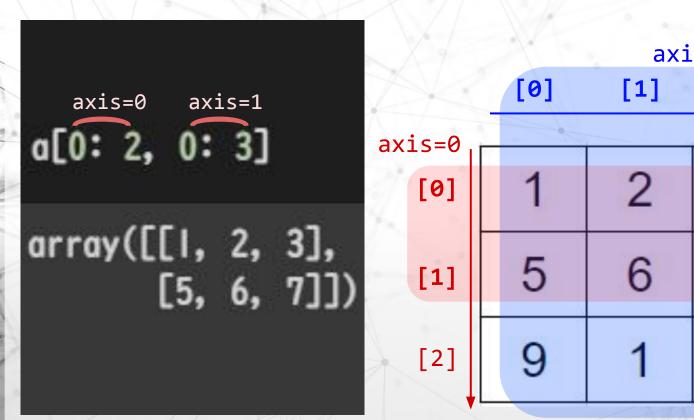
a[:,[0,2]]

### スライシングのstart, end, step (おさらい)

```
start
0, 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15
                         step = 3
                                     step = 3
                                                 step = 3
           step = 3
                a = list(range(30)) # 0^29を要素にもつList
                print(a[2: 15: 3])
               [2, 5, 8, 11, 14]
```

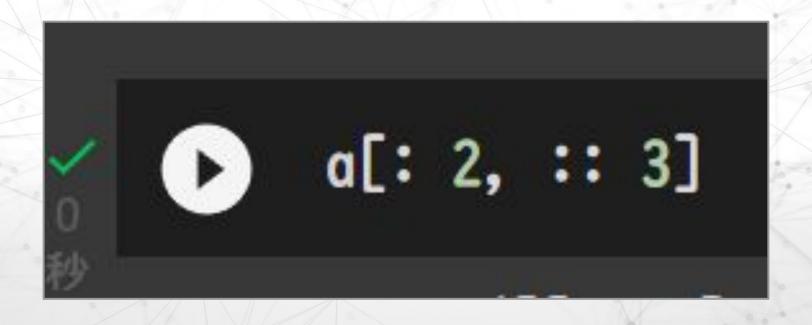
end

### スライシングによる範囲指定



		axis=1		
	[0]	[1]	[2]	[3]
axis=0			100	
[0]	1	2	3	4
[1]	5	6	7	8
[2]	9	1	2	3

#### これは行列aのどの要素を指定したことになるでしょう?



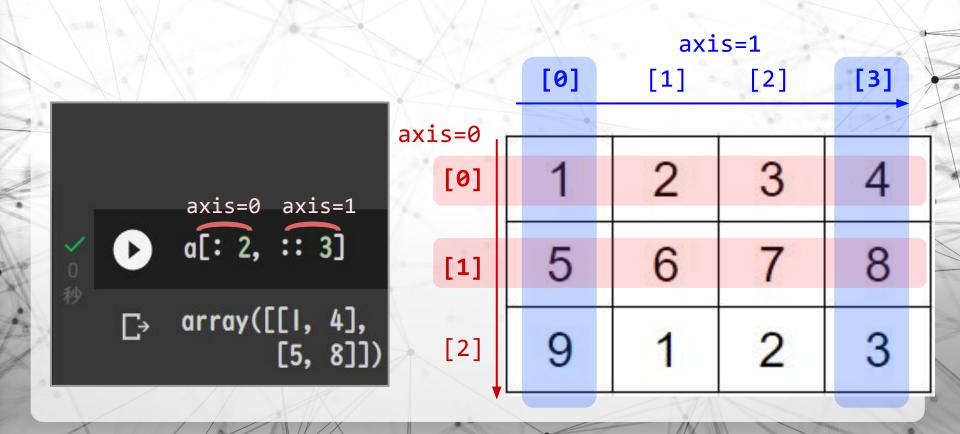
## 答え



# スライシングによる範囲指定



# スライシングによる範囲指定





2	2	3	6
0	6	7	9

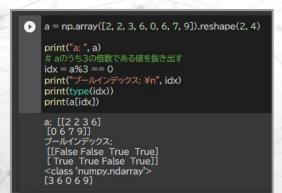
#### idx = (a%3 == 0)

a % 3 == 0

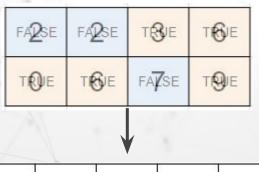
ユニバーサル計算を適用

#### ブール値の行列「idx」

FALSE	FALSE	TRUE	TRUE	
TRUE	TRUE	FALSE	TRUE	The Real Property of the Parket



↑今ノートブックでみていたコード



3 6 0 6 9



出力結果は一次元配列